

バイリンガル・マルチリンガル (BM) 子どもネット第1回学習会 報告 1

Report 1 Bilingual/Multilingual Child Network (BMCN) First Annual Meeting, 2016

BM子どもネット第1回学習会は、次のように行われた。この文書(報告1)は学習会のプログラム第一部の要旨に「参考文献・参考ウェブサイト」を添えたものであり、本学習会を後援したICU教育研究所紀要『教育研究59号』に掲載されるものの一部である。

概要

日時	2016年8月10日(水)	午前11時 - 17時
場所	国際基督教大学ダイアログハウス(DH)	1階食堂および2階国際会議室
後援	ICU教育研究所	(http://subsite.icu.ac.jp/research/iers/)
参加者	98名 (海外からの参加者約15名)	参加者所属は NPO/自治体の学習支援グループ、教育委員会、大学、公立・私立学校、インターナショナルスクール、海外補習授業校、自治体行政関係者、臨床心理クリニック等。
学習会の概要	話し合い・語り合いランチ 11時半-13時 ダイアログハウス1階食堂Aエリア	自由に昼食をとりながら親睦をはかった。
	学習会 13時-17時 ダイアログハウス2階 国際会議室	第一部、第二部の2部構成で行われた。第一部では趣旨説明ののち、国内教育機関から2件、海外教育機関から1件のBM児教育実践報告と問題提起、地方自治体による家庭支援状況調査の報告1件が行われた。第二部では、「広報活動」「ガイドライン作成」「行政との連携」「学齢期別(幼児、小学児童、中・高校生徒)」の6つのワーキンググループにわかれての話し合いが持たれた。

学習会プログラム

第一部	13:00-13:15	趣旨説明・問題提起	中島和子
	13:15-13:45	現場の声を聞く (1)「スペイン語コミュニティにおける実践ー国内における取り組み」	高橋悦子
	13:45-14:15	(2)「多言語の子どもたちの教育を支えるー国際児1年生のための取り組み」	島田かおる
	14:30-15:00	(3)「海外のBM教育の実態」	桶谷仁美
	15:00-15:30	(4)「BM幼児家庭への子育て支援ー国内の地域における取り組み」	石井恵理子

第二部	15:45-16:00	四谷ゆいクリニックの紹介 阿部裕医院長, 田中ネリダ (臨床心理士)	中島和子
	16:00-17:10	ワーキンググループ(WG)による話し合い	参加者全員
	17:10-17:30	各グループの発表とまとめ (報告2を参照)	中島和子

I. 学習会第一部の発表要旨

趣旨説明・問題提起

バイリンガル・マルチリンガル子どもネット (BMCN) について

中島和子 (トロント大学名誉教授)

「バイリンガル・マルチリンガル子どもネット」(BMCN) は、複数言語環境に育つ子ども (以降 BM 児と呼ぶ) を「日本語も〇〇語もできる子」と前向きに捉えて、グローバル時代が必要とするバイリンガル・マルチリンガル人材の育成を目的とした保護者・教員・指導員・研究者・ボランティア等の組織である。BM 児の場合、家で話すことばと家の外で話すことばが異なる、あるいは家で話す言語が父親と母親で異なるというような家庭言語環境、また学齢期における国を越えての転校などの教育的背景が要因となって、年齢相応の言語能力が育たなくなることがある。一時的リミテッド状況とは、このように1つ以上の言語に触れて育つ過程で、どの言語も年齢相応のレベルに達しない一時的な状況を意味する。実際問題としては、子どもの年齢によって、さまざまな現象が現れる。2・3歳では「話し始めるのが遅い」、「親にも通じないコトバを話す」、4歳になると文字に興味を持ち始めるのが遅く「文字習得のレディネス」が育たない、小学校に上がると「文字を覚えるのが遅い」、3・4年になると「読み書きの基礎がしっかりしないため授業参加が難しい」、5・6年から中学にかけては「抽象的な思考が不得手」というような状況が、その実例である。前述したように、あくまでも一時的なものであり、環境が変われば解消するものであるにもかかわらず、特別支援教室に送られる BM 児が国内外において後を絶たない。機能的な障害とは異なり、多言語環境で育つ健常児の問題であることをまず保護者、そして子どもを取り巻く医師・看護師・保育士・教師・指導員・ボランティアなどが正しく理解することが肝要である。

現場の声を聞く

(1) 「スペイン語コミュニティにおける実践—国内における取り組み」

高橋悦子 (日本ペルー共生協会副会長)

発表者は外国人児童生徒の教育相談員としてスペイン語圏の人たちのための教育支援活動 (NPO) をしている。このような活動に必要な知識は日本語、母語、発達に関すること、コミュニケーション、また異文化間教育学の考え方などである。7年間開催している Y 市のプレスクールは小学校入学前の外国にルーツを持つ子ども対象に特別な指導案を作成して11月～3月までの間に実施。実施に当たって保護者に対しては、前もって『学校に必要な情報は提供して対応』という趣旨の書類にサインを依頼する (その後ほかの教育機関や支援機関につなぐ必要が生じるケースがある為)。さらに開始時および終了時には日本語と母語の語彙チェックテストを実施しており、ほとんどの幼児が日本語だけではなく母語の語彙も増加することを確認している。

集団の中の子どもの様子から発達上の問題について気づく事が多いが、その具体例を4つ挙げる。(1) 集団活動に参加することにより保護者自身、あるいは指導教師が相談の必要性を感じたケース、(2) 母語でのカウンセリングで相談の必要性を指摘されたケース、

(3) 当初より保護者から相談があり教育委員会から見学に来た後検査を行い、特別支援教室に行くことになったケース、(4) 幼稚園で支援教室にいたが、子どもの活動の様子から小学校からは普通教室に通学することになったケースなど。

今後の課題は、個人では問題解決に限界があり複数の目で考える必要があることを踏まえ、以下の通りである。

- ① どのような評価方法を使用して子どもの現状を知ればよいのか。
- ② 保護者に情報を伝えるためには何をすればよいのか。
- ③ このような現象を一般の人に理解してもらうためにはどうすればよいのか。

(2) 「多言語の子どもたちの教育を支える」—国際児1年生のための取り組み—

島田かおる（啓明学園初等学校国際学級 日本語担当）

啓明学園は全体の3割程度を、帰国、国際結婚家庭、在日外国人家庭の子どもたちなど多言語環境の子ども達とする私立学校で、発表者は小学生に長く日本語指導をしてきた。近年、途中編入の他に国際環境にある子どもたちの1年生入学、また多言語環境の上に発達の問題をもつ子どもたちの編入が目立っている。多言語環境にある場合、1年生児の日本語での読み書き習得の遅れは取り返しが難しく、その後ダブルリミテッド状況に至る大きな要因になる。幼児期からの語彙の少なさ、終わることのない漢字学習と漢字テストの語彙の難しさ、音訓読み変化による漢字熟語の読みと意味の理解に関する問題は、会話の流暢さに隠れて、1～3年生へと雪だるま式に膨らんでいく。そこで、日本語での学習能力と自尊心をサポートするために、入学・編入時の語彙能力検査、保護者への言語環境調査、国際家庭への日本語での学習に備えるためのガイドラインの提示、1年時の国語算数の時間の国際学級での取り出し個別指導の強化、漢字テストへ事前対応補助、また、早期の音韻感覚の耕しと特別支援の要素を含めたゲームの会など、さまざまな工夫をして指導している。

(3) 「海外のBM教育の実態」

桶谷仁美（イースタンミシガン大学、USA）

ミシガン州は、米国中西部に位置する自動車産業が盛んな州である。そのため、日系企業が500社近く存在し、日本語関連の教育機関も様々であると同時に、そこに通う子どもたちの家庭言語環境も様々ではない。日本語で教育が行われている機関は、在外教育施設である補習授業校を始め、現地の日本語・英語での双方向イマージョンスクールなどがある。また、ミシガン州では、現地校のK-12（幼稚園年長から高校3年生）のレベルにおいて、日本語が教科としても教えられている。

本発表では、多様な背景やニーズを持つ学習者がいる中、今回の会立ち上げのテーマである「グローバル時代が必要とするバイリンガル・マルチリンガル人材育成」のための一つのカギとして、「親」への支援の大切さを示し、それにまつわる活動の紹介を行った。

(4) 「BM 幼児家庭への子育て支援—国内の地域における取組」

石井恵理子（東京女子大学）

BM幼児家庭の子育て支援に関して、横浜市国際政策課および横浜市国際交流協会による3つの調査と調査報告会から見たこと、また、さいたま市で活動するボランティアグループ（地球っ子クラブ 2000）の親子参加型活動をもとに、幼児期の子どもの学びを促す働きかけの重要性について、分析・報告を行った。

横浜市での調査からは、乳幼児を抱えた外国人市民に、情報や周囲とのつながりの不足、子どもの居場所づくりや相談の場に関する要望が高く、子育て支援と日本語支援の連携の必要性が示された。極めて多様な意見が出され、多くの問題点が指摘されたが、一方、発達に問題があると思われる子どもに関わる問題や取り組み等については、全くその実態や当事者からの声

が拾えていない。そのことこそが、そうした親子の問題が認識・共有されにくく、対応がなされないという根本的な問題の表れであると考えられる。

地球っ子クラブの実践からは、皆で集中して体験する楽しい活動に親も巻き込むことで、ともに活動する楽しさ、集団での学びへの導きとなることが確認された。こうした活動は家庭内で質的に多様な言語活動や体験を取り入れることを親が意識し、子どもの発達を多面的にとらえることにつながるものと考えられる。

II 参考文献・参考ウェブサイト

『愛知県プレスクールマニュアル』

<http://www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/0000028953.html> (日本語)

<http://www.pref.aichi.jp/uploaded/attachment/16364.pdf>

<http://www.pref.aichi.jp/uploaded/attachment/16365.pdf> (ポルトガル語版) (愛知県で開発)

<http://www.pref.aichi.jp/uploaded/attachment/16366.pdf> (スペイン語版) (高橋悦子開発)

飯高京子ほか (2011) 『地域リハビリテーション』 特集 <外国語を使う家庭の子どもの発達と障害> 三輪書店

1. 飯高京子 「外国語を話す家庭の子どもの発達と障害」 906-910,
2. 築樋博子 「集住地域における外国人の子どもの幼児期の課題とプレスクール」 911-915,
3. 内海由美子 「子どものセーフティネットとしての大人のネットワーク—外国人散在地域である山形県の取組から」 916-919,
4. 島田かおる 「多言語環境と学習困難を抱えて移動する子どもたちへの支援—三か国語と「読み書き障害」を超えて」 920-923,
5. 中島和子 「外国語で話す家庭で育つということ—カナダの子育て体験を踏まえて」 925-927.

カミングハム久子 (1988) 『海外子女教育事情』 新潮選書

海外子女教育振興財団 (2014) 「母語の大切さをご存知ですか?—海外での日本語の保持と発達—」 海外子女教育振興財団

加藤真一・島田かおる他 (2006) 「帰国子女教育の現場から—時的ダブルリミテッド・セミリンガル現象からの脱出」 第7回母語・継承語・バイリンガル教育研究会資料集 45-73.

公益財団法人横浜国際交流協会 (2015) 『2014(平成26)年度横浜市委託事業日本語学習コーディネート業務 横浜で生活する就学前の外国人親子のための日本語学習支援・子育て支援調査報告書』

公益財団法人横浜国際交流協会 (2016) 『2015(平成27)年度横浜市委託事業日本語学習コーディネート業務 就学前の子供と親の支援に関する取組調査・報告会—外国人親子のん美本後学習支援子育て援調事情』

地球っ子クラブ 2000 (2007) 『～話そう!遊ぼう!知り合おう!～親子の日本語活動集』

地球っ子クラブ 2000 ホームページ <http://chikyukkoclub2000.com/index.html>

中島和子(2016) 『バイリンガル教育の方法—12歳までに親と教師ができること』 完全改訂版 アルク

日本ペルー共生協会(2015) 『2009年度~2014年度 大和市プレスクール実施報告書』

劉郷英・川上貴美恵・中田照子 (2013) 「日本における多文化・多言語環境に育つ外国人幼児の言語発達の実態と学習支援の現状と課題に関する検討—B県A市におけるプレスクール事業の取組を中心に—」 福山市立大学 教育学部研究紀要 Vol.1, 123-133.

李節子ほか (2014) 『保健の科学』 特集 <在日外国人の母子保健> Vol. 56. 杏林書院

1. 李節子 「これからの多文化共生社会における母子保健のあり方」
2. 南谷かおり, 「外国人母子の医療ニーズ—国際診療の現場から—」
3. 呉小玉 「地域に暮らす中国人母子の健康ニーズと看護支援のあり方—異文化共生の視点から—」
4. 櫻井縁 「外国人母子の居場所づくりの取組」

5. 花崎みさを 「FAH(フレンドシップ アジア ハウス)にこすもす での外国人母子への支援」
 6. 小島祥美 「フラジル学校における学校検診の試み」
 7. 新田祥子 「日本における親外国人の執政動向の分析-1987~2012年の調査から」
『リミテッド相談室ウェブサイト』 URL : <http://harmonica-cld.com/double-limited>
- 矢沢悦子・高橋悦子(2015)「実践報告：大和プレスクール『にほんごひろば』—小学校入学前の多様な言語背景を持つ子どもたちへの就学前教育・保護者支援」『異文化間教育』第41号 16-31.
- Adelson, V., Geva, E., Fraser, C. (2014). Identification, Assessment, and Instruction of English Language Learners with Learning Difficulties in the Elementary and Intermediate Grades: A guide for educators in Ontario school boards (Updated March, 2015).
- Armon-Lohen, S., de Jong, J. & Meir, N. (2015). Assessing Multilingual Children: Disentangling Bilingualism from Language Impairment. UK: Multilingual Matters.
- Bedore, L.M. and Pena, E.D. (2008). Assessment of Bilingual Children for Identification of Language Impairment: Current Findings and Implications for Practice. *Bilingual. The International Journal of Education and Bilingualism*. Vol. 11, No. 1. 1-29.
- Clay, M. (1985). The early detection of reading difficulties (3rd ed.). Portsmouth, NH: Heinemann.
- Cloud, N. (1994). Special education needs of second language students. In Genesee, F. (ed.) *Educating Second Language Children*. Cambridge University Press.
- Collier, C. (2002). Separating Difference from Disability: Assessing Diverse Learners, Second edition. CrossCultural Developmental Education Services, Ferndale, WA.
- Cost Action ISO804. (2011). Questionnaire for Parents of Bilingual Children. [http://www.bi-sli.org/files_members/background-**questionnaires/COST_Questionnaire_Short_English.pdf**](http://www.bi-sli.org/files_members/background-questionnaires/COST_Questionnaire_Short_English.pdf</b).
- Cummins, J. (1984). *Bilingualism and special education: Issues in assessment and pedagogy*. Clevedon, UK.: Multilingual Matters.
- ESL/ELD Resource Group of Ontario. (2011). English Language Learners: School-Based Considerations Prior to Referral for Psychological Assessment. Revised June 2011.
- Farnsworth, M. (2016). Differentiating second language acquisition from specific learning disability: An observational tool assessing dual language learners' pragmatic competence. *Young Exceptional Children*, 15. 33-45.
- Genesee, F. et. al. (2004). *Dual language development and disorders: A handbook on bilingualism & second language acquisition*. Baltimore, Maryland: Paul H. Brooks.
- Lock, R.H. & Layton, C.A. (2002). Isolating intrinsic processing disorders from second language acquisition. *Bilingual Research Journal*, Vol. 26, Issue 2 (Learning Disabilities Diagnostic Inventory, LDDI). 383-394.
- MacCoubrey, S.J., Wade-Woolley, L., Klinger, D., & Kirby, J.R. (2004). Early identification of at-risk L2 readers. *The Canadian Modern Language Review*, 61. 11-28.
- Munoz-Sandoral, F.A., Cummins, J., Alivarado, C.G. and Ruef, M.L. (1998). *Bilingual Verbal Ability Tests*. Riverside Publishing.
- Paradis, J., Emmerzael, K., Duncan, T.S. (2010). Assessment of English language learners: Using parent report on first language development. *Journal of Communication Disorders*, 43. 474-497.
- Wong Fillmore, L. (1990). Now or later? Issues related to the early education of minority group children. In Harris, C. (ed.) *Children at Risk*. (pp. 110-133). NY: Harcourt Brace Jovanovich.

文責 BM 子どもネット事務局 (鈴木庸子)
2016年10月15日
©2016 BM 子どもネット